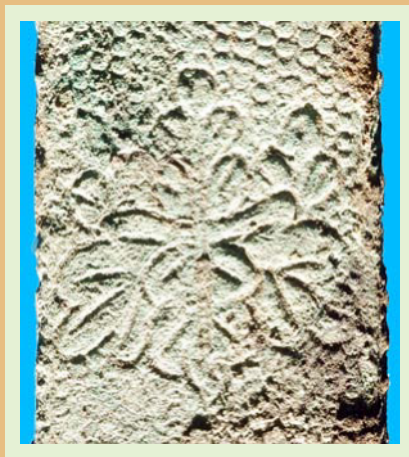


あの遺跡は今!part11
埋蔵文化財整理調査成果
中間報告会資料

出土品から見た近江の戦国時代

平成22年(2010年)8月22日



私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

米原市 清滝寺遺跡・能仁寺遺跡
大津市 関津城遺跡

米原市 清滝寺遺跡・能仁寺遺跡の調査成果

■ 京極氏関係遺跡「清滝寺遺跡・能仁寺遺跡」

清滝寺・能仁寺遺跡のある米原市は滋賀県の東北部に位置し、市域には、京極家の菩提寺である「清滝寺徳源院」をはじめとして、国史跡京極氏遺跡(上平寺遺跡・上平寺城跡・上平寺館跡)、弥高寺遺跡など京極氏ゆかりの寺院や城館が集中しています。調査地はこのうち、清滝山の山あいにある現在の「清滝寺徳源院」のすぐ南隣にあたります。

■ 京極氏の歴史と「清滝寺徳源院」

京極氏は鎌倉時代中頃に、宇多天皇の流れをくむ佐々木氏の分家として始まります。初代氏信は寺院を創建し、寺院は氏信の法号から「清滝寺」と呼ばれ、菩提寺となります。室町時代になると、京極氏は本家筋の六角氏を凌ぐ勢いを得て、幕府の要職に就くなど隆盛を極めます。戦国期には家臣であった浅井氏に実権を奪われ往時の勢いを失いますが、江戸時代には大名として存続します。江戸時代中頃には四国の丸亀藩主となった高和が所領の一部と交換に清滝の地を得、その子高豊によって寺院が整備されます。この時、寺は高和の法号から「徳源院」とされ、現在の「清滝寺徳源院」に至ります。

■ 調査の結果

調査では、平坦地を造るための複数次におよぶ大掛かりな造成が認められ、その上に掘立柱建物、五輪塔を用いた井戸、石組溝などの遺構が見つかりました。これらは出土遺物から室町時代後半のものと考えられ、京極氏が権勢を誇り活躍した頃のものとして推定されます。

見つかった平坦地や遺構には大量の土砂を動かし、石を多用しています。これらの運搬や造築には大変な労力を要したと推測され、大掛かりな土木工事を何度にもわたってなし得た京極氏の権威・権力の大きかったことがうかがえます。

出土遺物には、五輪塔や白などの石製品、常滑焼・古瀬戸等の壺や甕・香炉・碗・皿等、青磁の碗・皿等の輸入陶器、火鉢等の瓦質土器、土師器皿、瓦、鉄釘などがあります。輸入陶器や瓦の存在、土器は常滑や瀬戸・美濃産に偏る、鍋・釜など煮沸具がほとんどない、などの特徴がみられ、京極氏の実態や宗教観、遺跡の性格等を考える上で重要な情報といえ、今後分析していく予定です。

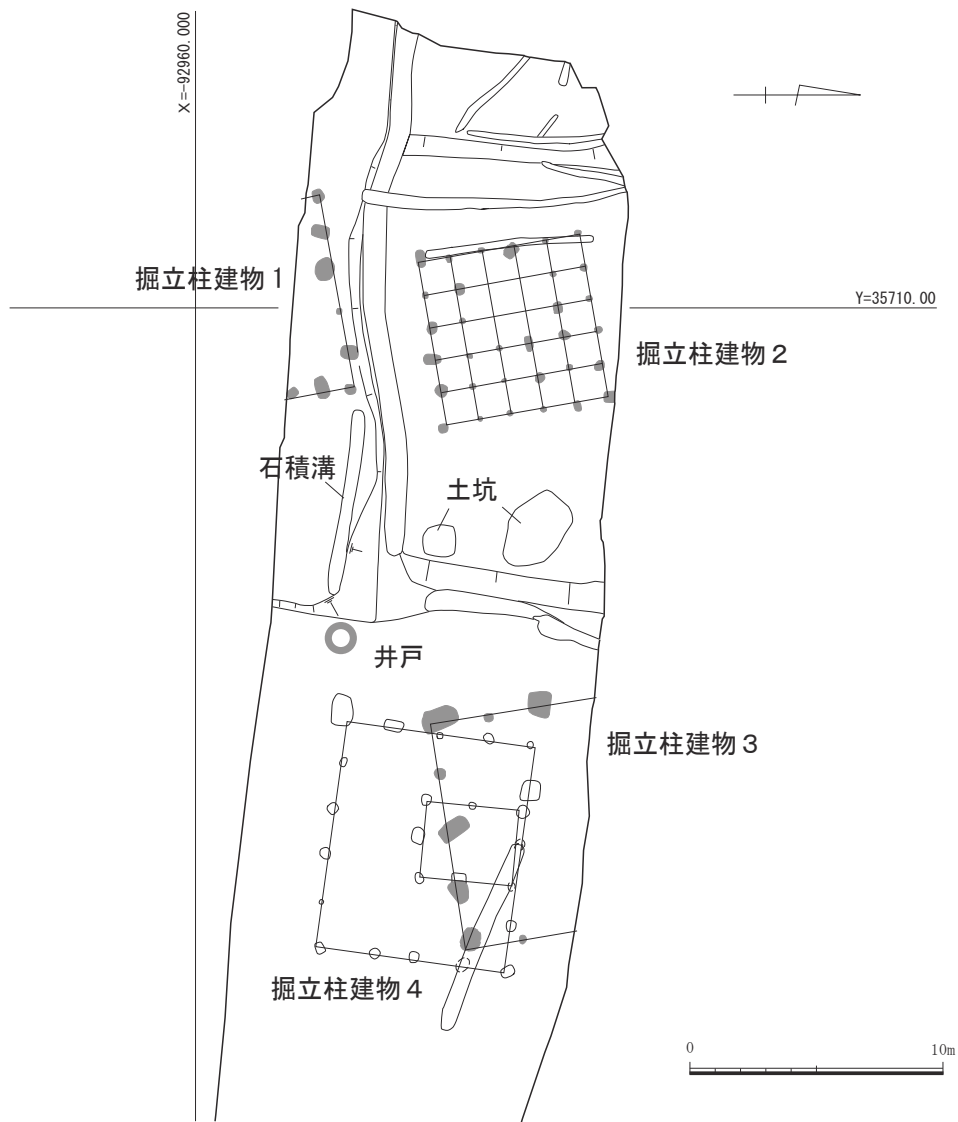
■ 調査の成果

調査から、京極氏の往時には、清滝の地に対して造成などの投資、整備が盛んに行われた様子がわかりました。現在の「清滝寺徳源院」は江戸時代に整備されたもので、それ以前の清滝の様子や、京極氏のほかの拠点については、いくつか推定され調査されていますが、全容ははっきりわかりません。また、丸亀藩主となりながら領地と交換してまで清滝寺を再興した行為が顕著に示すように、京極氏は浅井氏の台頭後急速に力を失いつつも、複数の拠点がある中で、「清滝」の地に強いこだわりを持ち続けます。当初は東山道に隣接する要所として、そして菩提寺として、精神的なより所として、大切な土地と捉えられていたと考えられます。

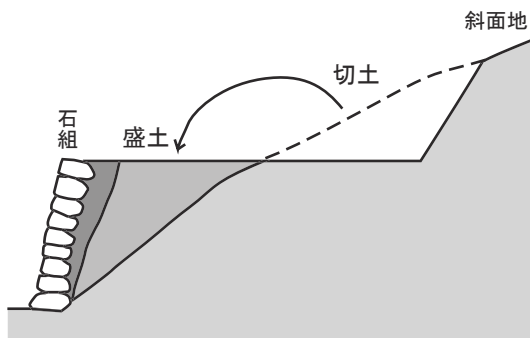
こうしたなかで、この京極氏元来の拠点である清滝の地における具体的様相の一端がわかったことは大きな成果といえます。



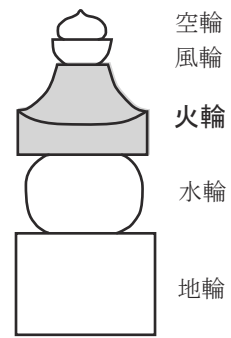
京極氏関係遺跡位置図 (S=1 : 30,000)



主な遺構の模式図(S=1/300)



造成の様子



五輪塔



歴代の墓所



平坦地の様子



平坦地の一部



平坦地の石組み



石組井戸上面



五輪塔を用いた石積井戸(断割ったところ)

大津市 関津城遺跡の調査成果

関津城は、清和源氏の流れをくむという宇野源太郎守治が承久の乱(承久3・1221年)で戦功をたてたことから、恩賞として鎌倉幕府から与えられたといわれています。関津の称名寺には、宇野氏の墓と伝えられる五輪塔が残り(銘はない)、大石龍門の八幡神社には、天文9年(1540年)の棟札に「田上関津宇野美濃入道」の名が伝わっていることから、その後の子孫も代々城主を務めたと思われる。しかし、城の構造や、いつ築造され、いつ頃まで機能していたかなど、具体的なことはよくわかっていませんでした。

■ 調査の成果

道路予定地内には、土塁で囲まれた曲輪跡が3か所に残存していました。それぞれ北裾の曲輪を第1調査区、西裾の曲輪を第2調査区、頂部の曲輪と豎堀および北裾・西裾の曲輪までの斜面を第3調査区としました。

◇第1調査区(北裾の曲輪)

土塁とその内側をめぐる排水溝のほか、ピット・土坑・溝を検出しています。また、調査区南西隅には東西方向に開口する虎口(出入口)があります。虎口北側の土塁端部は周辺の土塁よりも一段高くなり、階段状の石組みが見つかったことから櫓台と想定できます。

また、この虎口の部分には2個の礎石と2個の柱穴が見つかったことから、櫓門が設けられていたと考えられます。

◇第2調査区(西裾の曲輪)

約20cmの遺物包含層を除去した後、土塁および曲輪壁面とその内側をめぐる排水溝、礎石建物(建物1～3)のほか、井戸・ピット・土坑・溝を検出しました。建物1の建物内には、酒や油などを貯蔵したと考えられる甕倉(埋甕)が備わっています。

なお、建物1～3はそれぞれ3～4回の建て替えが行われています。

◇第2調査区の南東上段部

土塀を伴った土蔵施設(建物4)を検出しました。内法が約3.9m×3mの長方形、幅約30cm、残存高約20cmの土壁が残っていました。その内側は焼成を受けて赤色化し、さらにその内面には多くの焼土や炭、焼けた板、焼けた壁土が残っていました。土壁の基礎には、地覆石として石を一列に並べていました。また、壁内側に建てられた角材も炭化した状態で残っていました。

◇第3調査区(頂部の曲輪)

第3調査区では、土塁・礎石建物を検出していますが、現在も調査中ですので、詳細が明らかになりましたら、あらためて報告します。

◇出土遺物

第2調査区では、礎石建物の周辺や溝から、調度品を飾る金属製品、武器・武具、鉄釘、漆器などが多数出土しています。調度品では、屏風の押縁や銅製の鉾、何らかの容器か小型の厨子を飾る銅製の飾金具や蝶番、用途は不明ですが亀形の銅製品などがあります。武器・武具では、鉄砲の弾、鎧の鉄製脇板などが出土しています。また、漆器椀も出土しています。土器類では、信楽焼すり鉢や備前焼大賀目のほかに中国製の青花、青磁、白磁、天目茶碗、朝鮮製の壺などが出土しました。

また、土蔵内部からは、内側の焼土や炭の中から炭化した米や麦が出土しました。また、床板や野地板を打ち付けるのに使われた鉄釘も多数出土しています。

城の曲輪から、これだけバラエティに富んだ遺物が出土することは稀です。城主である宇野氏の実態は、よく分かっていませんが、近江の南の玄関口である瀬田川と関津峠を眼下に見下ろすこの地に居城を構えた当時の武士団の生活ぶりを如実に示す資料と言えます。

■ 発掘調査からわかる関津城の性格と構造

- (1) 戦国期城郭(土造り城郭)の防御機能の高さを具体的(視覚的)に明らかにした希有な調査事例となりました。
- (2) 全国で初めて、戦国期の城郭の中から、地覆石を基礎とし、さらに上部構造までが具体的に判る「土蔵」が発見されました。
- (3) 城郭内の空間利用の形態が、遺構、遺物の双方から具体的に想定できます。
 - 西裾の曲輪 建物 1 礎敷の床を持つ→床構造から倉庫的な建物
 - 建物 2 規模構造は不明であるが、井戸を伴う→炊事に関連する建物
 - 建物 3 陶磁器、土師器および金属製品が集中して出土→饗応に用いる財を収めた蔵
 - 中段の建物 建物 4 中段にある土蔵建物。大量の炭化穀物が出土。→穀物蔵

現在に残された城の状態は、城として利用された最終形態であり、長期間使用されたと想定できる場合は、普請(土木工事)や作事(建築工事)で改変されていることを想定する必要があります。特に、地域支配に有利な位置に立地する山城の場合、落城後も勝利者が占領地支配のために再使用し、後の改修を受けることになります。

関津城の場合、建物が火災を受けて複数回建て替えられたことがわかりましたが、出土遺物の時期幅はさほど広くないことから、短期間のうちに建て替えが行われたものと考えられます。



関津城遺跡上空から瀬田川を望む



第1図 関津城遺跡と周辺の中世城館

0 1000m
(S=1/50,000)



第2図 関津城遺跡 主な遺構配置図 (S=1/1,000)

第1調査区（北裾の曲輪）



第2調査区（西裾の曲輪）



第2調査区（西裾の曲輪）



第3調査区（頂部の曲輪）



第3調査区（竪堀と穀物蔵）

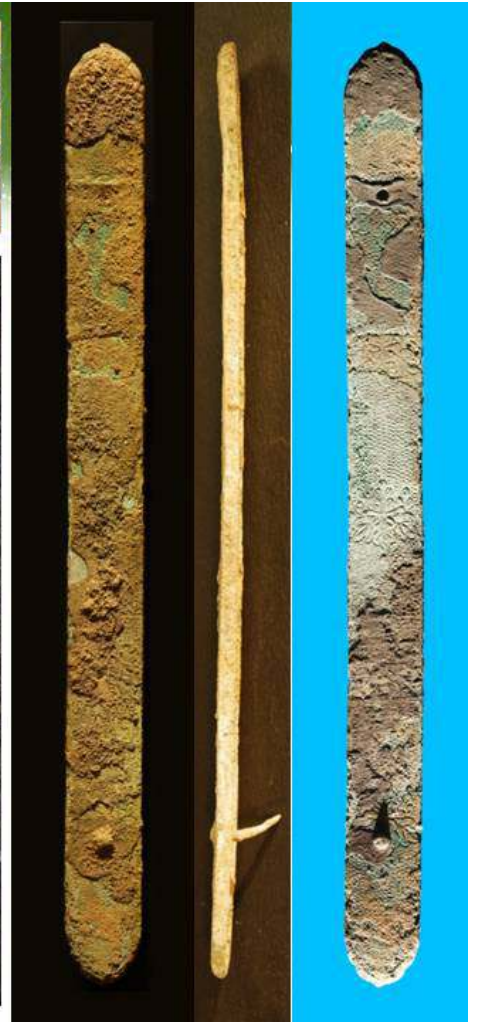


さまざまな出土遺物



飾金具=押縁
(屏風の飾金具)

屏風



桐文 桐文といえば...豊臣秀吉
だけじゃない?



後醍醐天皇 ⇒ 足利尊氏
 足利義輝 ⇒ 三好義興・松永久秀・上杉謙信
 足利義昭 ⇒ 織田信長・細川藤孝
 ↓
 豊臣秀吉 ⇒ 家臣へ



五七桐と五三桐

五七桐 = 「菊文」の替文

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50



佐和山城遺跡出土
桐文銅製紐金具



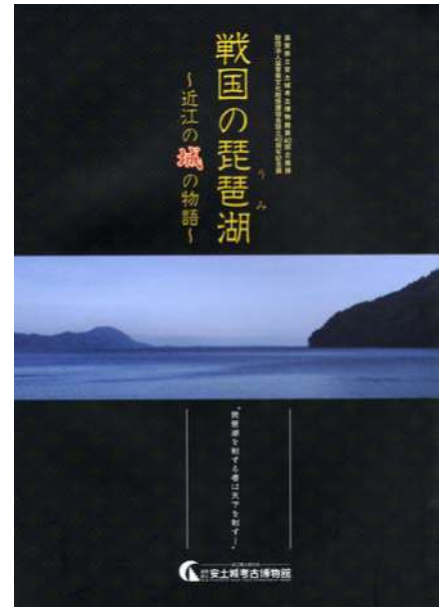
財団法人滋賀県文化財保護協会設立40周年記念展
滋賀県立安土城考古博物館第40回企画展

戦国の琵琶湖

—近江の城の物語—

期 間 2010年7月17日(土)～9月26日(日)
場 所 滋賀県立安土城考古博物館
時 間 9:00～17:00(入館は16:30まで)
入場料 大人:450円(360円) 高大生:250円(200円)
※()内は団体割引料金
子ども・障害者・県内在住65歳以上については無料
休館日 月曜日(ただし7月19日、8月16日、9月20日は開館)

プロローグ 城の国・近江
第一章 琵琶湖を制する者は天下を制す
第二章 目からウロコの戦国時代
第三章 描かれた城・創られた城のイメージ
エピソード・城を活かし伝える現在の武士(ものもの)たち
特別寄稿 「新視点・城がもたらした平和」



琵琶湖を中心とする近江には、1,300か所を超える城跡があり、国内屈指の「城の国」です。今回の展示では、戦国時代を中心に琵琶湖を取り巻く数多くの城郭を、戦略的な側面だけではなく、政治的・社会的機能に注目して戦乱の時代から泰平の時代への胎動を城の国・近江から見ていきます。また、戦国武将の活躍した時代から今日に至るまで、あらゆる形で描かれた城や忍者・武将の生活の実態に、近年の発掘調査成果や資料・美術品などから迫ります。

展示期間中の関連行事として、今後実施するのは次のとおりです。

■ これから実施する関連行事 ■

◇土曜ギャラリートーク(展示解説)

毎週土曜日、忍者の服を着た専門調査員が、滋賀県にあるお城の秘密について語ります。

第5回 8月28日「目からウロコシリーズ2 忍者って何者？」

第6回 9月4日「目からウロコシリーズ3 信長の巨大鉄甲船」

第7回 9月11日「城絵図に見るウソ!ホント!？」

時 間 10:30～ / 15:00～ (各45～60分)

※事前申込不要【別途入館料が必要です】



◇博物館講座「近江の城・発掘最新情報—佐和山城・肥田城ほか—」

日 時 平成22年9月12日(日)13:30～15:00

会 場 博物館セミナールーム(定員140名)

参 加 当日受付・無料

◇ポスターセッション「お城遊びはおもしろい」

城を守り活かす「現代の武士(ものもの)」が大集合!!

各団体が活動している城郭と活動内容をパネルで紹介します。

☆参加団体:番場の歴史を知り明日を考える会・近江のろしの会・

上平寺まちづくり推進委員会・小谷城址保勝会・

清水山城楽クラブ・聖泉大学肥田城水攻め研究会

日 時 9/18(土)9:00～17:00

会 場 博物館エントランス(無料)

